

第6回はちのへ演劇祭

熱意の伝染 街巻き込む

世良 啓



市民による市民のための一風変わった演劇祭が、もう6年も続いていると、この春で出かけてみた。

会場入口で小さな木箱(箱馬)を渡される。シアター内部は黒一色、演劇祭に先立って開催された青森初上陸の「ジャパン・アヴァンギャルド・アングラ演劇傑作ポスター展」のポスター105点が天井から吊り下げられ、半世紀たつていよいよ鮮やかに色を放ち続けている。

会場左右には小舞台があつて、二つの舞台の間の好きな場所に箱馬を置けばそれが今回の観客席になった。ひとつ劇が終わると、客は箱馬を動



八戸学院大学演劇部「面接室」の一場面

かしの劇の方を向く。り外された。

そのカタカタ音まで演出 毎年スタイルを変えてのよう、ささやき声も 進化する「はちのへ演劇祭」、今年も南部拠点の届く空間にはテント芝居 劇団六つが集結、30分の客と演者の境目はすっきりとがった短編を持ち寄っ

た。どれもこの地で暮らす実感と地続きで、ユーモアと笑いの中にざらりと不条理を潜ませ、めでたしめでたしでは終わらない。

劇場化するメディアの表裏でずれ続ける人間の引き裂かれた声を立ち上げたI&Aのひとり芝居。淡々とつなぐピースが最後に切れて散らばる瞬間に哀しみを爆発させた劇団INTELEVIS TA(インテルビスタ)。大黒屋ぶろでゆるすは、オリンピック前後の会社人間の日常を世代間コンプレックスや奇怪な絆で描き、まぐねつと。comは今どきの恋愛事情を爆笑ハイテンポで進めながら欠乏が生む現代の闇へと客を引き込む。

今回旗揚げの八戸学院大学演劇部は、津軽女と南部男の方言コメディ、就活や郷土愛をシニカルに折り返す榎谷伸夫の脚本と学生のフレッシュな体当たり演技が絶妙だ。ここに十和田のベテラン劇団かしの会が加わ

った6本から1公演につき3本ずつ組み合わせる上演するユニークなオムニバス形式、ひとつも同じ組み合わせがない。幕あいに旅人ダンサーの踊りや制作の田中勉が俳優として出演する劇間劇まで用意され、遊び心、サービスマン満載だ。

他人に期待せず、まつろわず、自分たちが決めて自分たちがやる。そんな熱意が静かに伝染してくる。舞台は氷山の一角、この祭の裏にどれほど多くの人が関わっているのだろう。演者も裏方も観客も、街ごとぜんぶ巻き込んでこの祭は南部の演劇人を発掘、増殖させている。それはえんぶりのように日常と非日常の間の垣根をほぐし、雪の中で春を呼ぶ行為に似ている。いまこの国の健忘症を治すのは演劇の街八戸かもしれない。

(文筆家、藤崎町)

※「はちのへ演劇祭」は3月16、18日、八戸市の八戸ポータルミュージアムはっちで上演された。